

わたしの聖戦

◎◎女性が働くといふこと◎◎ 5

医学ジャーナリスト 植田美津江

名刺の功罪

日本人は名刺が好きだ。好きというより、「こだわり」があるといつてもいい。

特にバリバリ仕事をこなす男性たちは、退職後名刺がなくなるとたんに手持ち無沙汰になり、不安にも似た感情に襲われるようである。

また、応対する側も、名刺がないと相手のことが皆目わからず戸惑ってしまう。名刺は英語では「ビジネスカード」である。つまり名刺とは、仕事の前段階の儀式に必要なものであり、双方にとって仕事に運ぶための潤滑油の役割を果たす。名刺を持つことは、

だ。前者の、所属名が明記してある名刺のほうが反応がいい。つまり、あれこれ説明を求められることなく、名刺を出しただけで自己紹介が済んでしまう。それに比べ、フリーの印象を与える後者の名刺の場合、相手はち

する社会のとらえ方を表しているのかもしれない。いいかえると、組織の一員として存在するほうが話が早く楽であり、どこかの組織にも属していない場合は、その仕事ぶりを認めてもらうのはなかなか大変だということでもある。

間は後回しになってしまふという、ある種の錯覚作用が名刺にはあるように思えるのだ。

名刺がないと落ち着かないというのは、組織や肩書きがないのと同義だからだろう。学校卒業を控えると、ほとんどの人間が就職活動をするが、圧倒的に公務員や大企業に人気を集めるのは、「自分は何をしたのか」でなく、どこに所属しているかを重視している結果ではないだろうか。

当然とい

えば当然だが、

考えてみれば、

どこに所属

しているか

というより、

その中でど

んな仕事を

しているか

が大切なのに、

その点が軽

視されている

ということこ

とはないだろうか。誰も

が知っている大企業の社

員であれば、それだけで

何となく納得してしまう

傾向に陥ってはいないだ

ろうか。企業の業績や評

判、知名度がそのまま社

員に反映され、本人が何

をしているのか、との質



よつといぶかしげな顔を
する。しばらく時間を置
いて「どんな仕事をして
いるのですか」と聞かれ
ることも多い。

これは、どこかの組織
に所属しており、何らか
の肩書きがある者と、フ
リーで仕事をする者に対

私は、「医学ジャーナ
リストです」と堂々と名
刺を差し出し、今現在取
り組んでいる仕事やこれ
からの夢をきちんと伝え、
対する相手に自分自身を
知って欲しいと思う。名
刺があってもなくても、
それができるような仕事
をしていくことがいつで
も必要だと信じている。